

ハイキング、吸血ヒルに注意 血止まらず強いかゆみ

服の隙間から侵入

2013/6/30 付

野山に生息し人や動物の血を吸うダニが注目を集めているが、ハイキングや農作業などをする際は「ヤマビル」にも気を付けたい。すその隙間などからひそかに侵入し、感触もないまま1時間以上も吸い続ける。一度吸われると血が止まらず、1カ月近くかゆみが続く場合もある。特に梅雨の季節は動きも活発になるので、注意してほしいと専門家は呼び掛けている。

今月10日、神奈川県秦野市の丹沢山系の水無川沿いにある約1キロメートルのハイキングコースで、丹沢山小屋組合の組合員ら約10人が、ヤマビル駆除用の薬液を山道に噴霧した。毎年、梅雨明け後に多くのハイキング客が訪れるため、ヤマビルが最も活発になるこの時期に一齐に駆除してしまおうという狙いだ。

■自治体が駆除活動



ヤマビルは全国各地に生息している

この活動は昨年からはじめた。市が補助金を出し、自治会などに駆除剤などを提供している。駆除の際に足元に寄ってくるヤマビルの数は、昨年は1人当たり約3匹だったが今回は1~2匹に減った。秦野市環境保全課の及川和也さんは「継続することで駆除の効果が出ている」と話す。

陸上にすむヤマビルは「山の吸血鬼」とも呼ばれる。ミミズなどの仲間で体長3~5センチ、伸びると5~7センチ程度になる。円筒形で吸盤を持ち尺取り虫のように進む。湿気の多い場所を好み、落ち葉や小石の下などに潜む。春から秋にかけての気温20度以上で、雨天や雨上がりの湿った蒸し暑い日によく見かける。

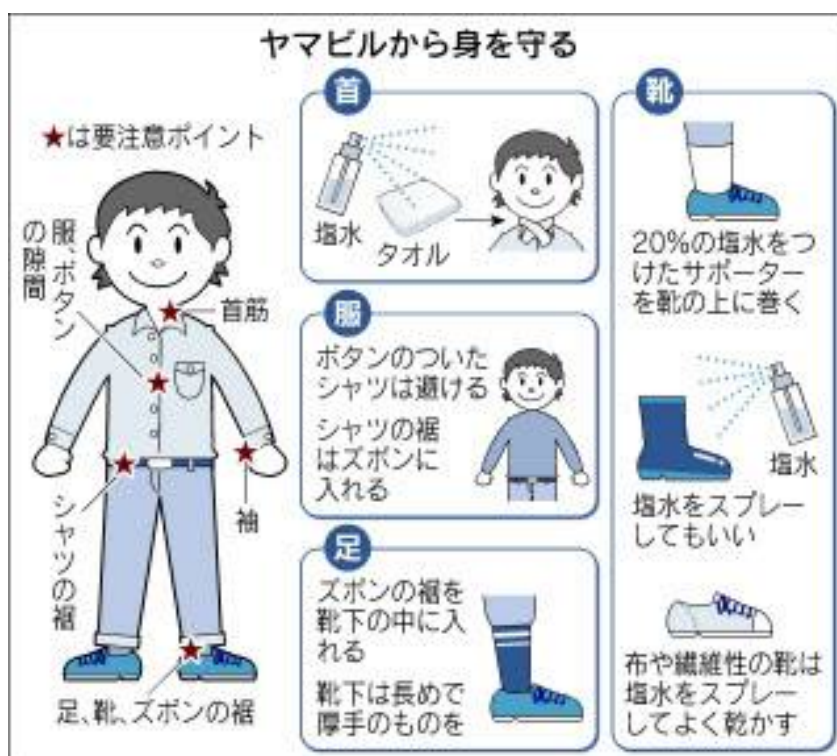
もともとは山奥に生息し、シカやイノシシなどの血を吸っていた。しかしシカなどが餌を求めて里山に出てくるようになり、ヤマビルも生息地を広げた。秋田県から沖縄県までほぼ全国で確認。例えば神奈川県では、里山とそこに隣接する住宅地でも吸血被害が多く報告されている。

「ヤマビルの怖さは気付かないうちに近づき、長い時間吸血することだ」。環境文化創造研究所（東京・新宿）でヤマビルを研究する谷重和・主任研究員はこう話す。ヤマビルの吸盤の周囲には、

動物や人の息に含まれる二酸化炭素(CO2)や体温などを感じるセンサーが付いており、これを手掛かりに近づいて吸い付く。吸盤に並んだ細かい歯で皮膚を切り裂く。

人は出血すると、フィブリンという血液を凝固させる物質が働き、かさぶたとなって血を止める。しかし、ヤマビルが吸血中に出す「ヒルジン」という物質はフィブリンの働きを妨げるので、「少なくとも1、2時間は出血し続けていたら血が流れる」(谷主任研究員)。吸血されている間は、蚊に刺された時のように気付くケースはほとんどないという。

■塩水で退治

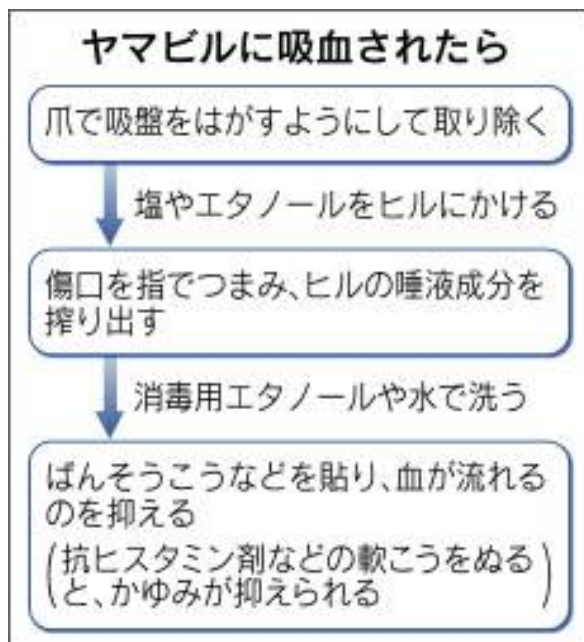


吸血される場所で最も多いのが足で約半数を占める。次いで手や首、頭部だ。吸われた後には猛烈なかゆみが出やすい。そのかゆみが1カ月近く続くことも多いという。まれに発熱やめまいを訴えるケースもある。また全身にじんましんのような斑点ができ、発熱も加わって入院した女性の報告例もある。

では山歩きなどをする際、どうやってヤマビルの被害を避けるか。神奈川県県央地域県政総合センター(厚木市)が作成した対策マニュアルなどによると、服装に気を付け、ヤマビルの侵入経路を塞ぐことが大切だという。

具体的には、長靴や地下足袋などを履き、サンダルや運動靴などはできるだけ避ける。靴下も長くて生地が細かいタイプがよい。長ズボンのすそを靴下の中に入れ、上着も長袖を選んですそをズボンの中に入れる。ボタンが付いたシャツは避ける。隙間からヤマビルが入ってくることもあるからだ。

首の対策も怠らない。ヤマビルはナメクジと同じく塩に弱い。首や肩周りに濃度 20%程度の塩水を含ませたタオルを巻いておこう。市販の忌避剤を靴や衣類に塗る方法も推奨されている。



吸血された場合は、吸盤に向かって爪でそぐようにして皮膚からヤマビルを取り除き、塩水や消毒用エタノールなどをかけて殺す。そして傷口をつまんでヒルジンを搾り出し、消毒用エタノールや水で洗う。ばんそうこうを貼って血が流れるのを抑えよう。

抗ヒスタミン剤などのかゆみ止めの軟こうを患部に塗ればかゆみも抑えられる。ハチに刺された時に使用するアンモニアを含む薬は、「かえって症状を悪化させるので使わない」(谷主任研究員)。

こうした対策を講じても症状が続き、発疹や熱などが治まらない場合は、皮膚科などを受診するとよいだろう。

(川口健史)